

2020 年度 入学試験問題

国 語

(第 3 回)

[注意]

1. 試験開始の合図があるまで、この問題冊子の中を見てはいけません。
2. 解答用紙は、問題冊子の中にはさんであります。試験開始の合図があったら、解答用紙を取り出して受験番号と氏名を記入し、QRコードシールをはりなさい。
3. 解答はすべて解答用紙に記入しなさい。
4. 問題冊子の余白等は自由に使って構いません。
5. 試験終了後、解答用紙のみ提出し、問題冊子は持ち帰りなさい。

東京都市大学附属中学校



【注意】国語の問題では、字数制限のあるものは、特別な指示がない限り句読点等も一字に数えます。

1 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「見えない」という身体的な特徴が、情報を処理する方法の違いを生むということは、ものを考える方法にも影響を与えるということです。ものを考える方法、要は「頭の使い方」です。ひとくちに視覚障害といってもいろいろな種類がありますが、障害の違いによって、「頭の使い方」に違いが生まれる場合があります。ここではひとつだけ、立体視能力の例をあげておきましょう。

アメリカの神経生物学者、スーザン・バリーは、その ^a チョシヨ 『視覚はよみがえる』（筑摩選書）で、四十八歳のときに、特殊な訓練によって初めて立体視能力を獲得したときの経験について語っています。

通常、人間の脳は左右の目から届く情報の「ずれ」によって、対象までの距離や立体感を把握しています。しかしバリーは斜視で、長い間それができなかった。バリーの脳は、よく見える方の目からくる情報だけを「信用」して、もう片方の目からくる情報は「無視」していた。代わりに彼女は頭を細かく動かし、無理矢理視覚に「ずれ」を作ること、なんとか距離感を把握していました。それでも車の運転だってこなしたし、研究者として膨大な量の文献を読み、論文を発表していました。

そんな彼女が、四十八歳にして初めて立体視ができるようになった。物の立体感や、物と物の位置関係がわかるようになったので、初めての部屋に入ってもとまどうことはありません。内装がどうなっているか、その全体を一瞬で把握することができるようになったからです。 A 「空間とはなにか」がわかるようになったのです。それは「魅力的でうっとりする」感覚だったとバリーは言います。空間の中にテーブルや椅子があり、その同じ空間に自分もいる。「自分がちゃんと世界に存在している感じ」を、バリーは四十八歳にして初めて手にいれたのです。

そんな大きな変化を経験した彼女において、情報を処理する仕方はどんなふうに変わったのでしょうか。彼女によれば、初めての部屋に入って空間の全体をぱっと把握できるようになったように、たとえば論文を読むときにも、全体を一気に把握できるようになったそうです。それまでの彼女の情報処理の仕方は、^①「部分の積み重ねの結果、全体を獲得する」というものだった。ところが立体視ができるようになったことで、「まず全体を把握して、全体との関係で細部を検討する」という思考法ができるようになったのです。視覚の能力が思考法にも影響を与える、興味深い例です。

見える人と見えない人の空間把握の違いは、単語の意味の理解の仕方にもあらわれてきます。空間の問題が単語の意味にかかわる、というのは意外かもしれませんが、けれども、見える人と見えない人では、ある単語を聞いたときに頭の中に思い浮かべるものが違うのです。

たとえば「富士山」。これは難波さんが指摘した例です。見えない人にとって富士山は、「上が

ちよつと欠けた円すい形」をしています。いや、実際に富士山は上がちよつと欠けた円すい形をしているわけですが、見える人はたいいそのようにとらえていないはずですよ。

見える人にとって、富士山とはまずもって「八の字の末広がり」です。つまり「上が欠けた円すい形」ではなく「上が欠けた三角形」としてイメージしている。平面的なのです。月のような天体についても同様です。見えない人にとって月とはボールのような球体です。では、見える人はどうでしょう。「まんまる」で「盆ぼんのような」月、B厚みのない円形をイメージするのではないのでしょうか。

三次元を二次元化することは、視覚の大きな特徴のひとつです。「奥行きおくみのあるもの」を「平面イメージ」に変換へんかんしてしまう。とくに、富士山や月のようにあまりに遠くにあるものや、あまりに巨大きよだいなものを見るときには、どうしても立体感が失われてしまいます。もちろん、富士山や月が実際に薄っぺらいわけではないことを私たちは知っています。けれども視覚がとらえる(1)的なイメージが勝ってしまう。このように視覚にはそもそも対象を平面化する傾向けいこうがあるので、重要なのは、こうした平面性が、絵画やイラストが提供する文化的なイメージによつてさらに補強ほくわうされていくことです。

私たちが現実の物を見る見方がいかに文化的なイメージに染められているかは、たとえば木星を思い描えがいてみれば分かります。木星と言われると、多くの人はあのマーブリングのような横縞よこしまの入った茶色い天体写真を思い浮かべるでしょう。あの縞模様しまもようの効果もありますが、木星はかなり(2)的にとらえられているのではないのでしょうか。それに比べると月はあまりに平べったい。

【I】も平面的な印象を強めるのに一役買いっやくかひつていそうですが、なぜ月がここまで二次元的なのでしょう。

その理由は、言うまでもなく、子どものころに読んでもらった絵本やさまざまなイラスト、あるいは浮世絵うきよえや絵画の中で、私たちがさまざまな「まあるい月」を目にしてきたからでしょう。紺色こんいろの夜空にしつとりと浮かびあがる大きくて優しい黄色やまの丸——月を描くのにふさわしい姿とは、およそこうしたものでしょう。

こうした月を描くときのパターン、C文化的に醸成じょうせいされた月のイメージが、現実の月を見る見方をつくっているのです。② 私たちは、まっさらな目で対象を見るわけではありません。「過去に見たもの」を使って目の前の対象を見るのです。

富士山についても同様です。風呂屋ふろやの絵に始まって、種々のカレンダーや絵本で、デフォルメされた「八の字」を目にしてきました。そして何より富士山も満月も縁起物えんぎものです。その福々しい印象とあいまって、「まんまる」や「八の字」のイメージはますます強化きやうかされています。

見えない人、特に先天的に見えない人は、目の前まへにある物を視覚でとらえないだけでなく、私たちの文化を構成する視覚イメージをもとらえることがあります。見える人が物を見るときにおのずとそれを通してとらえてしまう、文化的なフィルターから自由なのです。

D、見えない人は、見える人よりも、物が実際にそうであるように理解していることにな

ります。模型を使って理解していることも大きいでしょう。その理解は、概念的、^{がいねんてき}と言つてもいいかもしれません。直接触ることのできないものについては、辞書に書いてある記述を覚えるように、対象を理解しているのです。

^b テイギ通りに理解している、という点で興味深いのは、見えない人の色彩の理解です。

個人差がありますが、物を見た経験を持たない全盲の人でも、「色」の概念を理解していることがあります。「私の好きな色は青」なんて言われるとかなりびっくりしてしまうのですが、聞いてみると、その色をしているものの集合を覚えることで、色の概念を獲得するらしい。たとえば赤は「りんご」「いちご」「トマト」「くちびる」が属していて「あたたかい気持ちになる色」、黄色は「バナナ」「踏切」「卵」が属していて「黒と組み合わせると ケイコクを意味する色」といった具合です。

ただ面白いのは、私が聞いたその人は、どうしても「混色」が理解できないと言つていたことでした。絵の具が混ざるところを目で見たことがある人なら、色は混ぜると別の色になる、ということを知っています。赤と黄色を混ぜると、中間色のオレンジ色ができあがることを知っています。^E、その全盲の人にとっては、色を混ぜるのは、机と椅子を混ぜるような感じで、どうも納得がいかないそうです。赤十黄色〓オレンジという法則は分かっても、感覚的にはどうも理解できないのだそうです。

もう一度、富士山と月の例に戻りましょう。見える人は三次元のを二次元化してとらえ、見えない人は三次元のままとらえている。つまり前者は平面的なイメージとして、後者は空間の中であらえている。

だとすると、そもそも空間を空間として理解しているのは、見えない人だけなのではないか、という気さえしてきます。見えない人は、^d ゲンミツな意味で、見える人が見ているような「二次元的なイメージ」を持っていない。でもだからこそ、空間を空間として理解することができるのではないか。

なぜそう思えるかというと、視覚を使う限り、「視点」というものが存在するからです。視点、つまり「どこから空間や物を見るか」です。「自分がいる場所」と言ってもいい。もちろん、実際にその場所に立っている必要は必ずしもありません。絵画や写真を見る場合は、画家やカメラが立っていた場所の視点を、その場所ではないところにいながらにして獲得します。顕微鏡写真や望遠鏡写真も含めれば、肉眼では見ることのできない視点に立つことすらできます。想像の中でその場所に立つこうした場合も含め、どこから空間や物をまなざしているか、その点が「視点」と呼ばれます。

同じ空間でも、視点によって見え方が全く異なります。同じ部屋でも上座から見たのと下座から見たのでは見えるものが正反対ですし、はたまたノミの視点で床から見たり、ハエの視点で天井から見下ろしたのでは全く違う風景が広がっているはずです。けれども、私たちが体を持って

このことを考えれば、目が見えるものしか見ていないことを、つまり空間をそれが実際にそうであるとおりに三次元的にはとらえ得ないことは明らかです。それはあくまで「私の視点から見た空間」でしかありません。

(伊藤亜紗『目が見えない人は世界をどう見ているのか』より)

問1 —— 線 a↘d のカタカナを漢字に直しなさい。

問2 空らん ↘ について後の問いに答えなさい。

- (1) 一つだけ異なる接続語が入るものを選び、記号で答えなさい。
- (2) (1)で選ばなかった四つに共通して入る接続語として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 また 2 ところが 3 なぜなら 4 つまり

問3 空らん ↘ には「二次元」「三次元」のいずれかが入ります。その組み合わせと

して最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 (1) 三次元 (2) 三次元
- 2 (1) 三次元 (2) 二次元
- 3 (1) 二次元 (2) 三次元
- 4 (1) 二次元 (2) 二次元

問4 —— 線①「部分の積み重ねの結果、全体を獲得する」とありますが、これとは逆に「細かい部分にこだわりすぎた結果、物事の全体を見失う」という意味の慣用句として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 海老で鯛を釣る 2 木を見て森を見ず
- 3 河童の川流れ 4 井の中の蛙大海を知らず

問5 空らん【I】にあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 潮の満ち引きをもたらす性質
- 2 月の明るさは太陽光の反射であるという性質
- 3 昇る高さによって大きさが異なって見える性質
- 4 満ち欠けするという性質

(問題は次のページに続く)



2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

東京に住んでいる中学二年生の有里は、毎年夏休みに母方の実家がある新潟に帰省している。新潟には有里の祖母と共に、母の姉である光子おばさん、その娘である中学一年生の千絵も住んでおり、有里は嫌味の多い千絵に苦手意識を持っていた。しかし、今回の帰省では到着早々に有里の方から千絵に嫌味を言い、それによって機嫌をそこねた千絵と会話をしなくなっていた。

それでも、八月十六日にある神社のお祭りに、二人はいっしょに出かけなければならなかった。毎年、おばあちゃん手作りのおそろいの浴衣を着て、お祭りに出かけるのが恒例で、さすがに千絵ちゃんもそれをイヤがることはできないみだった。

「さーさ、どうぞ」

お祭りの日の夕方、おばあちゃんは二人に出来上がったばかりの浴衣をプレゼントしてくれた。
「わあ、かわいい！」

有里は、おばあちゃんを喜ばせるために、今年も大げさに喜んでみせた。今年の浴衣は紺地に赤いぼたんの花があしらわれているものだった。だけど今年もまた、おばあちゃんがつくってくれた浴衣は、有里が着るには着丈や袖丈が足りなかった。おばあちゃんは何度言っても、千絵ちゃんと有里が同じ背丈だと思いきんでいて、十センチ以上小さい千絵ちゃんの身体にあわせて浴衣をつくってしまうのだ。

「あらあ、東京の子は背のびるの早いんねえ」

そしておばあちゃんは、今年もまた、そんなとんちんかんなセリフで、自分の失敗を棚にあげた。

① 「でも、大丈夫よ。そんなにおかしくないわ。ねっ、有里、気にならないわよね」
お母さんの言葉に、有里はうなずくしかなかった。

「うん、気にならないよ」

毎年のことなので慣れっこだったし、どうせお祭りのときしか着ないのでべつにいいやと思うことにしていた。

「おばあちゃん、来年も元気でいて、私たちの浴衣をつくってね」

おまけに、そんな 健気なセリフもつけくわえた。

「そうらのお。来年もつくってやれるといいのお」

有里の言葉に、おばあちゃんは嬉しそうにしていたし、お母さんも満足そうな顔をしていた。暗くなるのを待って、二人はそろって神社にむかった。

「千絵ちゃんって、浴衣がすごく似合うね」

二人きりになるのは、お土産を渡したとき以来だった。

「いいな、田舎の子はこういう格好が似合って」

下駄^aをカラカラと鳴らしながら、すっかり日暮れた道を歩く。道路にそって流れる小さな川から、さわさわと水の流れる音がする。

「こつちに住んでると、流行とか気にしなくていいんでしょ？」

有里は意地悪なことを言わなきゃと必死だった。それは攻められる前に、攻めようという有里の作戦だった。だって千絵ちゃんがこのまま黙^{だま}ってるわけがないから。言われっぱなしなわけがないから。

「東京にいると、去年の服なんて恥^はずかしくて着れなくてさ」

それは「有里ちゃんの肌^{はだ}が弱いのは、東京の水がきたねえせいだてえ」とか「中学受験するなんて東京の子はかわいいそー」なんて言われつけづけてきた、仕返しのつもりだった。

「いいなあ、田舎の子は気楽で」

そして、有里が思いつく嫌味は、田舎に住んでいることをバカにすることくらいだった。

「私もこーんな、のどかなところで、のんきに暮^くらしたいよ」

それは、なにかって言えば「東京」の悪口を言われてきた、仕返しのつもりだった。

「なんなのよ！」

すると、千絵ちゃんが突然^{とつぜん}、持っていたきんちゃくを地面にたたきつけた。

「田舎、田舎ってバカにしないでよ！」

そしてくると身体をひるがえすと、すたすたと家のほうへともどって行ってしまった。有里はそんな千絵ちゃんの後ろ姿を見つめながら、大きくため息をついた。意地悪を言って、ひどく気分が悪かった。有里は千絵ちゃんのきんちゃくを拾うと、自分もまた今来た道を引き返した。同じように浴衣を着た子供たちが、楽しそうにおしゃべりをしながらすれちがっていく。はしゃいで駆け回っている子供たちを見て、有里はやっぱりのどかだなあと思った。空気が澄^すんでいるせいか、月が明るく夜道を照らしてくれる。涼^{すず}しい風が気持ちよく、首筋を通り抜^ぬけて行く。

玄関^{げんかん}の引き戸をガラガラと開けると、お母さんがあわてたように有里を出迎^{でむか}えた。

「どうしたの？ ケンカでもしたの？」

「してないよ」

有里は下駄をぬぐと、とぼとぼと自分たちが寝泊^{ねとま}りしている客間のほうに向かった。

「でも千絵ちゃん、すごく怒^{おこ}った顔して一人で帰ってきたわよ」

「知らないよ」

有里はひどく疲^{つか}れていた。

「千絵ちゃんに謝^{あやま}ってきなさい」

客間にもどると急に力が抜けて、有里はペタンと床^{ゆか}に座^{すわ}り込んだ。

「いいから謝^{あやま}ってきなさい」

有里の背後でお母さんの声がする。

「どうして悪くないのに謝らなきゃいけないの？」

有里はぼそりと言った。

「あなたのほうがお姉さんでしょ？」

お母さんは有里の真正面に座って、有里の手をとった。

「でも私は、千絵ちゃんのお姉さんじゃない」

有里はお母さんに握にぎられているその手をパッとひっこめた。

「私は謝らない！」

そう怒鳴り返した瞬間、頬ほおに衝撃しょうげきがはしった。お母さんが頬たたを叩いたのだとわかるまで、少し時間がかかった。

「どうして……？」

有里の目から、はらはらと涙が落ちた。

「どうして、我慢がまんするのは、いつも私なの？」

お母さんに頬をはたかれるなんて初めてで、ショックだった。

「どうして謝るのはいつも私なの？」

お母さんもまた有里の頬を叩いてしまい、気まずそうだった。

「どうして私にこんなつんつるてるんの浴衣を着せるの？」

ファッション雑誌の編集者をしているお母さんが、浴衣の丈の長さが気にならないわけがないのだ。

「どうして私は欲ほしくもない編みぐるみを、嬉しそうにもらわなきゃいけないの？」

「お世話になってるんだから、気遣きづかうのが当然でしょう？」

お母さんが有里の目を見ないで言う。

「違うよ」

だから有里は思いきって言った。

「お母さんは、私をいい子にしたいだけじゃん」

もう、限界だった。

「お母さんは、光子おばさんに、負けたくないんだよ」

その言葉に、お母さんがハッとした顔を見せた。

「私が千絵ちゃんより、いい子でいることで、光子おばさんより、ずっと上手に子育てしてるって、おばあちゃんにアピールしたいんだよ」

おばあちゃんたちが、お母さんが働いてることを良く思っていないことは、知っていた。

「子供を保育園に預けて、働くって、なーは我がままらのお」

おばあちゃんにそんな風に言われているのを、有里は見たことがあった。

「小さいうちは、親がそばにいてやらんばかわいそーだてえ」

そんな風に光子おばさんに言われているのだって聞いたことがある。お母さんはそう言われても

「そうねえ」と気のない返事をするばかりだったけれど、すごく悔しそうだった。けして言い返さなかったけれど、うつむいてこっそり唇をかんでいた。

「有里ちゃん、お母さんに家にいてもらいたいよね。働いてなんてほしくないよね」
だからそう話しかけるおばさんに、有里は言ったものだ。

「ううん、保育園楽しいよ。お友達もいっぱいいるし、先生もやさしいから、有里は保育園に行きたいの」

本当は、保育園に行きたくないなあっていう日もあった。お母さんが家にいてくれたらなあっと思うことだってあった。だけど、有里はお母さんの味方になりたかった。お母さんを困らせるようなことはしたくなかった。お母さんにとって仕事が大切だって知ってるから自分のために辞めてほしくなかったのだ。だって楽しそうに仕事をしているお母さんが、好きだったから。私も大人になったら、お母さんみたいになりたいって憧れていたから。

「働いてるせいで子育てを失敗してるって思われたくないんでしょう？」

だからお母さんが悪く言われないために、おばあちゃんたちの前では、いい子でいるようにしてきた。千絵ちゃんにムカつくことを言われても、じっと耐えてきた。

「だけど、もう我慢するのはイヤ」

お母さんがうつむいて、目頭をおさえている。

「いい子でいるのはもう無理なの」

そんなお母さんを見て、有里もまたひどく切ない気持ちになる。

有里はもう、自分を止められなかった。

「もう私、自分の思うとおりにしていいよね」

③ 黙って首をたてに振るお母さんのスカートに、涙がぼたぼたと落ちる。

「じゃあ、千絵ちゃんのとこに、行ってくる」

有里はこれで千絵ちゃんに謝れると思った。いい子ぶるわけじゃなくて、千絵ちゃんにウソなんかついて、気分が悪かったから。自分のために、謝りたかった。

「有里」

立ち上がると、お母さんが有里を呼び止めた。

「ごめんね」

振り向くと、鼻を真っ赤にしたお母さんが有里を見上げていた。

「ずっと、ごめんね」

「うん」

有里は小さくうなずくと、あわてて部屋を出た。

お母さんの傷ついた顔を見るのは、辛かった。けどもうこの程度のトラブルで、お母さんは仕事を辞めたりしない。それぐらい、私は十分にちゃんと育っている。

だからお母さんには、もっと正々堂々としてほしい。自分の生き方が間違っていないことを証明

するのに、育てている「娘」を見せるんじゃないなくて「自分自身」を見せてほしい。自分の人生は間違っていないってことを、自信を持ってアピールしてほしい。

本当は自慢じまんのお母さんだから、やっぱり働くお母さんをすごく格好いいと思っているから。

(草野たき「いつかふたりで」より)

問1 —— 線A「健気な」・B「切ない気持ち」のここでの意味として最もふさわしいものを次から一つずつ選び、それぞれ番号で答えなさい。

A 健気な

- 1 相手を喜ばせる感心な
- 2 自分の気持ちと反対な
- 3 元気ではつらつとした
- 4 その場をとりつくろう

B 切ない気持ち

- 1 あわれに思うような気持ち
- 2 いかりがつのるような気持ち
- 3 胸がしめつけられるような気持ち
- 4 どうしていいかわからないような気持ち

問2 —— 線a、eのことは表現のうえから二つのグループに分けるとどのようなになりますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 (a・b) | (c・d・e)
- 2 (b) | (a・c・d・e)
- 3 (a・b・c) | (d・e)
- 4 (a・c) | (b・d・e)

問3 —— 線①「お母さんの言葉に、有里はうなずくしかなかった」とありますが、この時の有里の心情として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 自分の体に合わない浴衣を着せられることにいらだつたが、すぐに忘れてしまうおばあちゃんにそのことを言ってもしかたがないと思っている。
- 2 サイズの合わない浴衣を着ることは抵抗ていこうがあるが、ここでお母さんにいかりをぶつけてみてもこの浴衣は今さらどうにもならないと思っている。
- 3 サイズの合わない浴衣を無理に着るようにながすお母さんにいらだちを感じたが、そのことを伝えてお母さんを怒らせたくないと思っている。
- 4 自分の体に合わない浴衣を着ることは抵抗があるが、この場で文句を言うことによつてお母さんの立場を悪くしたくないと思っている。

問4 ——線②「大きいため息をついた」とありますが、この時の有里の心情として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 千絵ちゃんに意地悪を言うことでほのかな満足感を得たものの、物を投げつけ激しく怒る千絵ちゃんの普通^{ふつう}ではない様子を見て怖^{こわ}くなってしまっている。
- 2 自分から嫌味を言い続けたことで、千絵ちゃんに嫌味を言われることは避け^さけられたものの、千絵ちゃんが怒って帰ってしまったことに後味の悪さを感じている。
- 3 思いつく限りの嫌味をあげせてねらい通りに千絵ちゃんを怒らせてみたものの、寂^{さび}しうに歩く千絵ちゃんの後ろ姿を見て、少し言い過ぎたと思っている。
- 4 田舎をばかにすることで千絵ちゃんより優位に立ってみたものの、そのことが結果的に大好きなおばあちゃんに対する悪口になってしまったと反省している。

問5 ——線③「黙って首をたてに振るお母さんのスカートに、涙がぼたぼたと落ちる」とありますが、この時のお母さんの様子を説明したものととして、最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 自分の母親に、働いていてもちゃんと子育てができていくことを認めてもらうために、娘には聞き分けのよい「良い子」であることを求めてきたが、そのことが娘を苦しめることにつながっていたことに気づき、自責の念にかられている。
- 2 自分の母親に、働きながらも立派に子育てをしていることを示すために理想的な母という姿を追い求めてきたが、そのことに反して娘はただ表面的に「良い子」を演じることにせず、このままでは子育てが失敗したことになるかと残念がっている。
- 3 自分の母親に、親が働いていても娘は自然と「良い子」に育っていくはずだという子育てに対する自論を示してきたが、突然反抗^{はんこうてき}的な態度をとる娘を見て、やはり親が常に娘と向き合っただけでこなかったからだとして反省し、娘に対して負い目を感じている。
- 4 自分の母親に、働いていても娘を「良い子」に育てている姿を見せられれば、働きに出ることも認めてもらえるはずだと思いきい子育てに励^{はげ}んできたが、娘は自分の気持ちを理解してくれず、もう母親に認めてもらうことはあきらめるしかないと思っている。

問6 ——線④「謝りたかった」とありますが、ここから有里がどのような生き方を望んでいると読み取れますか。本文をふまえて十五字以内で答えなさい。

問7

この文章の内容としてふさわしいものを次から三つ選び、それぞれ番号で答えなさい。

1 おばあちゃんの手作りの浴衣を見た有里と千絵ちゃんは、おばあちゃんを喜ばすために、おおげさな態度で喜びを表した。

2 お祭りの後、一人で家に戻った有里は、千絵ちゃんを先に帰したことをお母さんからきつくがめられ、玄関で言いあいになった。

3 お祭りの夜、浴衣を着て走り回る子供たちの仲の良さそうな姿を見て、有里は昔は千絵ちゃんもあの子たちのように無邪気だったのにと、残念がった。

4 お母さんから叩かれたことにショックを受けた有里は、暴力への嫌悪から今までため込んでいた思いを一気に吐きだした。

5 有里は自分を守るために先手をうって千絵ちゃんに意地悪なことを言い続けたが、その言葉は本心から出たものではなかった。

6 子供を保育園に入れて働くことをおばあちゃんに反対されているお母さんを見て、有里は同情し、いつもお母さんの味方でいようと考えた。

7 お母さんとの言い合いで自分の思いをぶつけた有里は、このことが原因でお母さんがふさぎ込んでしまうのではないかと心配した。

8 おばあちゃんやおばさんを意識して体裁を気にしつつも、仕事を辞めずになんばり続けるお母さんを有里はずっと応援していた。

(問題は次のページに続く)



3 次の詩を読んで、後の問いに答えなさい。

うつろとからっぽ

谷川 俊太郎

心がうつろなとき

心の中は ① 空き家です

② 埃だらけクモの巣だらけ

捨てられた包丁が錆びついている

心がからっぽなとき

心の中は草原です

抜けるような青空の下

はるばると地平線まで見渡せて

うつろとからっぽ

似ているようで違います

心という入れものは ①

空虚だったり空だったり

無だったり無限だったり

問1 空らん ① にあてはまることばとして最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答

えなさい。

1 神出鬼没

2 公平無私

3 縦横無尽

4 伸縮自在

5 針小棒大

問2 ——線①「空き家」とありますが、これと同様な表現で「空き家」と対になることばを詩の中からぬき出しなさい。

問3 ——線②「埃だらけクモの巢だらけ／捨てられた包丁が錆びついている」とありますが、

これは心がどういう状態であることを表していると考えられますか。最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 知性が活用されていないということ
- 2 個性をまったく尊重していないということ
- 3 理性が徐々に芽ばえはじめているということ
- 4 感性を働かすことができないということ
- 5 特性を見きわめようとしないうということ

問4 「うつろ」と「からっぽ」とに関する説明として最もふさわしいものを次から一つ選び、番号で答えなさい。

- 1 「うつろ」は「空虚」、「からっぽ」は「無限」と言い換えることができ、ともに大切にしなければならぬ気持のことである。
- 2 「うつろ」は「無限」、「からっぽ」は「空虚」と言い換えることができ、それぞれ穏やかな心の状態をあらわしたものである。
- 3 「うつろ」は「空」、「からっぽ」は「無」と言い換えることができ、心のうつりかわりや喜怒哀楽によって生じるものである。
- 4 「うつろ」は「無限」、「からっぽ」は「空虚」と言い換えることができ、まったく対照的な心づかいをあらわしたものである。
- 5 「うつろ」は「空虚」、「からっぽ」は「無限」と言い換えることができ、たがいに異なる心のありようをしめしたものである。

問5 この詩の構成や表現について説明したものととして最もふさわしいものを次から一つ選び、

番号で答えなさい。

- 1 第一連と第二連には、どちらにも直喩が用いられている。
- 2 第二連には倒置が用いられているが、ほかの連にはない。
- 3 第一連から第三連のすべてに体言止めが用いられている。
- 4 第一連と第二連とは内容的に対比の関係にあると言える。
- 5 それぞれ連の前半と後半は因果関係の構成になっている。
- 6 擬人法を多用することで簡潔で明快な表現になっている。

4 漢字の部首は、形は異なっても同じ意味を表していることがあります。例えば、衣と衤は同じです。アゝオの漢字に、同じ意味を表す部首を加えると熟語ができます。組み合わせとなる部首の意味を1〜7から選び、それぞれ番号で答えなさい。なお、同じ番号はくり返し使いません。また、熟語になる漢字は小学校で習う字です。

(例) 復・制 + (答え) ころも ↓ 複製

- ア 八・害
- イ 占・丁
- ウ 原・白
- エ 青・今
- オ 耳・舎

- 1 にく
- 2 ひ・ほのお
- 3 くさ
- 4 て
- 5 みず
- 6 ころも
- 7 かたな

